

三月十九日のこと

鎌倉道彦

早春としては、暖かな日であった。宮城県に入ると、車内が明るくなったような気がした。車窓から梅の花が見えてきたからである。

塩竈駅に着くと、数人の句友に会った。今日は、第九回佐藤鬼房顕彰全国俳句大会の日である。まだ会場は、施錠されたままだった。開場まで一時間あまりある。坂を上りながら、鬼房小径に向かった。

小公園の木の芽もふつくらと膨らんでいる。足元の土もやわらかく息づいているように感じられた。その中に七つの句碑がひっそりと佇んでいる。ゆっくりと石に触れながら詠み進んでいった。ひとつ、またひとつ。それぞれの石に、それぞれの温かきがある。あたたかも、鬼房の温もりであるかのように。一時の安らぎを胸に、会場へ向かった。

大会は定刻に始まった。開会挨拶で高野ムツオ実行委員長は次のように述べた。「鬼房先生が亡くなられて間もなく二十年になる。

大会を毎年開けることを先生も喜んでいると思う。この大会の目玉は、鬼房俳句について考えるシンポジウムと公開選考会である。」と。私は、このシンポジウムと公開選考会が楽しみで、毎回参加している。今年はどんな話が聞けるのか。そしてどんな句に出会うのか。と思いつながら、椅子にふかぶかと腰掛けている。

木の芽晴鳥の餌台出来あがる
ジュニア部門の佐藤鬼房奨励賞の句である。素直で清々しい。高柳克弘先生の特選第一席の句である。高柳先生からどんなコメントが聞けるか楽しみにしていたが、神野紗希先生とともにご欠席とのこと、残念である。

鳥渡る少年という水たまり
私の好きな句である。少年期の揺れ動く心理が感じられる。良い句だと思ふ。「少年という水たまり」がいい。秋の透明感と少年の無垢な心が見えてくる。今回も、ジュニア部門の作品に感動し、多くの瑞々しい感性に出会った。幸せである。

続いてシンポジウム。今大会はへ鬼房俳句と戦争についてである。司会は栗林浩氏で、パネリストは関悦史、矢本大雪、関根かな、宇井十間（書面による参加）の各氏。そ

れぞれ選んだ三句を中心に議論が進んだ。鬼房の俳句は「戦争だから」という変化はない。「強固なりアリズムの枠で詠んでいる」「戦争を日常として詠んでいる」という議論は尽きない。また、想像していた鬼房像の一部が崩れ始めた。いつまでも鬼房は霧の中にいるもっともつと作品を詠み解かなければ。と思う。

最後は、当日の囁目句一〇四句の公開選考である。今年も素敵な句が並んでいる。それぞれの選者が気になる作品を挙げ、意見を交わした。時折、厳しい批評を述べる一面もあつたが、和気あいあいと進んだ。結果、佐藤鬼房奨励賞に平山北舟さんの

飛んでも更地飛んでも更地つばくらめ
に決まった。

大会後、近くの居酒屋で懇親会が行われた。大会の話俳句の話が飛び交い、満ち足りた顔、顔、顔がグラスを傾けている。私はその中にどっふり浸りながら、充実した一日を振り返っていた。今年も多くのことを学び、活力を得ることが出来た。また来年参加しよう。と決意しながら座を立ち、電車に飛び乗った。春が、もうそこまで来ている。

第九回佐藤鬼房顕彰全国俳句大会参加記②

鬼房のまなざし

齋藤 真里子

三月半ばの東北は春は名のみ、まだ肌寒さが残る季節。今年も三月十九日「佐藤鬼房顕彰全国俳句大会」が塩竈の地で「銀化」の主宰、中原道夫氏をお迎えして開催されました。九回目という歴史を重ねた大会。小熊座の先輩の方々が鬼房先生を師として尊敬し、大切に思うお気持ちを再確認致しました。私にとって鬼房大会は小熊座に入会させて頂いてから三回目の参加となります。

前回に続き受付、そして清記のお仕事をさせて頂きました。鬼房先生を俳句を通してしかお会いしたことのない私にとって、大会のお仕事に携われる事は、大変貴重な勉強の機会でもありました。今年はジュニアの部の応募総数は三、二二二句、一般部門においても二〇七一句と、大会の意義の大きさにも驚きました。ジュニアの部の奨励賞は、中学一年生のへ木の芽晴鳥の餌台出来あがる。まだあ

どけない少年の姿から想像もつかないみずみずしい感性のある句が選ばれました。また一般部門の奨励賞はへ鬼房の眼の泌み込んである冬木。隅々まで目の行き届いた鋭くもあり優しさをたたえた鬼房先生のお姿が目につかぶ、力を感じる句だと思いました。

次に毎年恒例のシンポジウムです。今年も「鬼房俳句と戦争について」と題してパネリストの方々の熱い討論が繰り広げられました。私は残念ながら大会の様子を見聞きする事は出来ませんが、戦争体験を経て戦後の社会性俳句へと繋がっていったのは、鬼房先生が知識階級とは違って、自己の直面した生活を作品化することによって、権威に対する抵抗を表現したかったからではないでしょうか。塩竈の風土と向き合う決意が借り物ではない、言葉の結晶としてどの作品からも響いてきます。

最後になりましたが、裏方でお仕事をしていらっしゃる方々に鬼房先生のお嬢様の美穂さんから数々の手作りの美味しい差し入れを頂き、お心遣いに暖かなお人柄にうたれました。高野ムツオ主宰のもと小熊座全員が一丸となって、終始暖かみのある大会でした。無口な鬼房先

生もお一人お一人を見詰めて大会の様子を見ていくのださつていたと思います。みちのくの空の深さのような澄んだ瞳で。早春の風が心地良く帰路に向かいました。



公開選考会